

1967年
死者43人、負傷者1100人以上
アメリカ史上最大級の暴動勃発
世界を揺るがした衝撃の実話

この夜を生き抜け

緊迫感と迫力…
強烈で、ひたすらパワフル!
本年度、アカデミー賞[®]最有力

Hollywood Reporter

今年、最も偉大で貴重な映画

Rolling Stone

40分の尋問シーンは『悪魔のいけにえ』以上の恐怖!
これは現在も続いているアメリカの狂気だ!

町山智浩 (映画評論家)

『ハート・ロッカー』『ゼロ・ダーク・サーティ』を超える衝撃。
極限サスペンスに貫かれたキャスリン・ビグロー監督最高傑作

DETROIT

デトロイト

『ハート・ロッカー』『ゼロ・ダーク・サーティ』
キャスリン・ビグロー監督最新作

デトロイト

『スター・ウォーズ/最後のジェダイ』
『バシフィック・リム:アップライジング』
ジョン・ボイエガ

『レヴェナント: 蘇えりし者』
ウィル・ポールター

『シビル・ウォー/キャプテン・アメリカ』
アンソニー・マッキー

www.longride.jp/detroit

監督:キャスリン・ビグロー 脚本:マーク・ポール
ジョン・ボイエガ ウィル・ポールター アンソニー・マッキー アルジー・スミス
提供:ハップ、アスミック・エース、ロンクライト 配給:ロンクライト

© 2017 SHEPARD DOG, LLC. ALL RIGHTS RESERVED.

1.26
全国公開

1967年、デトロイト暴動。逃げ場のないモーテルの一室で、何が起こったのか。

戦慄の40分—この衝撃を見逃すな!

女性初のオスカー受賞監督
キャスリン・ビグロー最新作

女性初アカデミー賞監督賞に輝いた『ハート・ロッカー』、続く『ゼロ・ダーク・サーティ』で作品賞他5部門にノミネートされたキャスリン・ビグロー監督。前2作の脚本マーク・ボールと再びタッグを組んだ5年ぶりの最新作。



1.26
全国公開

あの時いったい何が起きたのか?ビグロー監督は記録を縦糸に想像力を横糸に、裁判でも明らかにならなかった『真実』を丹念に紡いでいく。ドラマチックな飛躍が紛れ込む余地を安易に与えないその倫理観に敬意を表したい。

是枝裕和 (映画監督)

舞台は1967年に起きたデトロイト市の暴動。悲劇はその片隅で起きた白人警官と黒人住人との対立で生まれるが、司法は黒人二人を射殺した白人警官を無罪とする。今でも時折噴出する人種差別の事件。米国社会の黒い亀裂をズシリと感じさせる映画だ。

鳥越俊太郎 (ジャーナリスト)

緊張感のあるサスペンス。リンチ事件の只中にあるような臨場感がありながら抑制が効いていて、隔々まで静かな怒りのパワーが行き届いている。たった今、見るべき映画。

山崎まどか (コラムニスト / 翻訳家) ※11/30発売『週刊文春エンタ』より

1967年、日本はアメリカがもたらした自由と民主主義の下で、高度経済成長の真ただ中だった。しかし同じ頃、アメリカには実は白人のための自由と民主主義しかなかったのだ。今はどうか?映画の問いは深い。

辛坊治郎 (ニュースキャスター)

監督の繊細な場面設定に加え、見事なまでの俳優陣の迫力ある演技に早々に釘付けに。当時の露わになった衝突があるからこそ、改めて今も形を変えて残る差別について、多様性について考える必要がある。

モーリー・ロバートソン (ジャーナリスト / アーティスト)

重苦しい主題の牽引車にサスペンスを駆使した手腕に舌を巻いた。ビグロー (監督) の卓抜さは、トランプ支持層がむき出す「幼稚さ」を「童顔」の俳優に形象化したことに集約される。

越智道雄 (アメリカの政治・文化研究者)

50年前から今につながる1本の分断線。想像力のもたらす圧倒的リアリティを直視することが世界の分断を理解する第一歩になる。

津田大介 (ジャーナリスト / メディア・アクティビスト)

あらゆる"恐ろしい"という感覚を体験させる衝撃の142分。サスペンスでもホラーでもフィクションでもない。1967年の「アルジェ・モーテル殺人事件」を元に撮られたビグローの最新作は、暴動の裏側で蔓延する、社会が抱える秩序という闇を、映画という力をフルに活用して描き切る。凄かった。

小島秀夫 (ゲームクリエイター)

50年前の「サマー・オブ・ラブ」は同時に人種対立の夏でもありました。実際にあった事件に基づくこの力作で警察の残虐行為を見てみると、いまだに問題が解決されていないことを痛感します。

ピーター・バラカン (プロドキャスター)

名門レーベル、モータウンのスーパースター、テンプレーションズに憧れていたドラマティックス。彼らのキャリアに重くのしかかる運命の一夜。「ドゥ・ザ・ライト・シング」以来の衝撃の本質を突いた問題作だ。

吉岡正晴 (音楽ジャーナリスト)

冷静な事実の積み上げ。特殊な状態の中での不合理の連続に圧倒される。史実を一気に駆け抜ける追体験。だが、これは50年前の過去ではない。白人警官に対する黒人のやり切れない怒りは今も耐えがたき現実そのものだ。

前嶋和弘 (上智大学教授)

「極限状況下で一線を踏み越えてしまう者たち」を描いてきた剛腕監督が、ついに米国内の「戦場」にカメラを向けた……極めて鋭利かつ、残念ながら今もタイムリーな群像劇。

宇多丸 (ラッパー / ラジオパーソナリティ) ※11/30発売『週刊文春エンタ』より

キャスリン・ビグロー監督の映画は、いつだってヒリヒリするほど緊張感が高く、見終わるとドッと疲れが出る。だが、「デトロイト」は、その心地よい疲れに加えて、「歌を歌いたくなる」という思いがけない副作用があった。とても不思議な、決して不愉快じゃない後味が残る映画だ。

駒井尚文 (映画.com編集長)

1967年のデトロイト暴動のまるでドキュメントのような映像の連続で始まり、142分間、あらゆる胸の痛みを喚起しながら、問題の根幹にある差別への厳しい糾弾を伝える。傑作。

いとうせいこう (作家 / クリエイター) ※「twitter」より

極限に衝撃的な展開は呼吸をするのを忘れるほど。いかなるドキュメンタリーよりも体を射抜き、心を締めつけるアメリカのリアルに体の震えがとまらない。

長野智子 (キャスター)

黒人への不正義を、監督はジャーナリストのような手法で告発する。この不正義はいまも燃るだけでなく、イスラム教徒、移民へと広がりがつづいていく。デトロイト中心部はこの暴動以来、荒れ果てたまま。それは不正義が消えないことへの異議申し立てのようでもある。

五十嵐浩司 (元朝日新聞NY支局長 / 大妻女子大教授)

人間とはここまで残酷になれるのか、酷く暴力的になれるのか、恐怖感に全身震われながらスクリーンに吸い込まれていく。カメラワークと編集の技が「お見事!!」のひと言。気がつけば、実際に起こった史実の現場・デトロイトに私は居た。この映画を見逃すと後悔します。

堀尾正明 (フリーキャスター)

強烈な差別と暴力にゾッとさせる。これが実話で、さらにその差別と暴力が未だに鳴り止まないことにさらにゾッとさせる。ただこの重いテーマをビグロー監督は一流のエンターテインメントに仕上げた手腕に脱帽する! 面白い!

井上三太 (漫画家)

あの日、ソウル・ミュージックの拠点ミシガン州デトロイトで何が起こったのか……真相はこれだ! (Watcha See Is Watcha Get)。重い物語の中、(ここでも) 軽めの男を演じるジェイソン・ミッチェル (Eazy-E) にも注目を!

丸屋九兵衛 (bmr)

恐れることなく、キャスリン・ビグローの最高傑作と言おう。142分をこんな構成で作り上げるとはなんたる度胸。これが過去の海外の出来事では済まされない、この時世にこそ観るべき作品!

真魚八重子 (映画評論家)

正義は時として凶器になる。40分間に渡るキャスリン・ビグロー監督の執拗な拷問シーンは人間の尊厳の闘いを描いた映画史に残る厳しいシーンだ。映画はジャーナリズムだ。

角谷浩一 (政治ジャーナリスト)

派手な煽りの演出は一切なし。異常な緊張と恐怖に囚われた人間たち、そして刻一刻と悪化する現場の状況が、ひたすら克明に映し出される。その描写の並外れた迫真性と、決定的な「暴発」の瞬間に身震いせずにはいられない。

高橋諭治 (映画ライター)

人は不完全なものだ。個人のいいところも悪いところも、心中の葛藤も危険な思い込みも、全てを飾らずに見せるのがビグロー監督の描き方。当然、不完全な人からなる社会も不完全だ。「デトロイト」を見てアメリカ社会を知ろう。

パトリック・ハーラン (芸人 / コメンテーター)

見るべき映画が50年を経て日本に上陸。トランプ大統領の支持基盤デトロイト。闇の歴史が息詰まる演出で活写される。観客は胃がキリキリ痛む。痛みの中でアメリカの今も見えてくる。見逃せない作品だ!

川村晃司 (テレビ朝日コメンテーター / ジャーナリスト)

決して抗えない現実に直面すると人はどうなるのか、劇中それに象徴される尋問シーンは、衝撃の極致だった。社会的に難しいテーマの映像化を見事に表現した本作。「人として知るべき大切なこと」は何か?考えさせられる映画と言っても間違いはない。

高島康彰 (シネマカフェ編集長)